

●事例紹介

## 学生相談室の紹介

「学生の「自分づくり」を支援する器として」

山崎 恭子

(広島修道大学学生相談室担当課長)

### 概要

### 特集・学生支援関連施設

本学の学生相談室は、一九七〇年学生課の所管で開設され、専任職員一名・非常勤の精神科医一名・数名の兼任相談員（運営委員を兼ねる）でスタートしました。初期には新入生を対象としたスクリーニングテストなどを実施、心と身体の健康を掲げた保健管理センター構想もありましたが、次第にその方向性は消滅し、より広いニーズに応じる「よろず相談」施設として、また「学生の成長・発達を支援する」施設として存続してきました。一九七〇年の開設当初から専任職員を置いたこと、一九七七年頃から談話室（学生のフリースペース）の活動を始めたこと、また一九八三年から専任のカウンセラーを置いたことなどは、いず

れも時代を先取りした先進的なことだったと言えるのではないかと思います。

相談室開設当初は単科だった本学ですが、その後の学部増により、現在では五学部九学科五研究科を擁し、学生数も大幅に増加しています。それと同時に学生像も多様化し、学生期の課題や教育的・成長促進的支援の必要性も変化してきています。本学では比較的早い時期から学生相談室を設置し、さまざまな活動に取り組んできましたが、その後の大学の発展の中ではいささか取り残された感があります。全学的な学生支援体制の中で「学生相談施設」は「カウンセリングを中心とした、より専門的な支援ができる」ところ」と位置づけられますが、本学の学生相談室の位置づけはやや中途半端な状態のように思えます。今後、全学的

な学生支援体制を考えていくなかで、学生相談施設の役割や位置づけなども改めて考えていく必要があると感じています。

スタッフ

本学の相談室には常勤のスタッフが二名います。一名は専任カウンセラー、もう一名は専任職員(担当課長)です。二名とも臨床心理士および大学カウンセラー資格を有しており、実質は専任カウンセラー二名体制と言っていると思います。二名とも職員身分ですので、講義やゼミなどは持つておりません。勤務時間中は原則的に相談室にいないことになりません。カウンセラーとしての役割以外に、インテーカーとしての役割や事務的な仕事、また後述する談話室での学生との日常的な関わりなどを二名で分担している状況です。

常勤二名の他に四名の非常勤カウンセラーがいます。内二名は学内の教員で週一コマずつ、あとの二名は学外から週四時間ずつ、四名とも臨床心理士です。また月に二回、三時間ずつですが、精神科医が来られ、相談にあたっておられます。

運営の統括としては、教員の中から相談室主任が選ばれ(現在は学生部の次長が兼任している)、また各学部から一名ずつ学部相談員が任命され、相談および運営に携わって

います。

活動内容

「間口は広く、奥行きは深く」というのが、本学の相談室です。必要に応じて情報提供から継続カウンセリングまで、幅広く対応することができます。場合によっては他部署との連携や学外他機関の紹介なども行います。また休憩や交流の場としての「談話室」の活動、さらには一泊二日の「たんぼほセミナー」やコンパ形式の「対人関係研修会」などのグループ活動、「興味関心マップづくり」や「映画上映会」などの各種講座も企画実施しています。

二〇〇三年度からは教職員を対象とした活動として、五月と一〇月に講義形式の「学生対応ガイダンス」を、九月に参加型の「学生対応ワークショップ」を開催しています。また年四回「相談室だより」を発行し、広報活動に努めています。

本学の相談室は開設当初から「よろず相談」の看板を掲げていましたので、相談内容は多様です。また利用の形態も、一々数回の単発相談から数年にわたる長期的な関わりまでの幅があります。

二〇〇五年度の相談室利用者は延数二一四四名、実数は三九九名で在学生全体の約六・二％になります。利用内容による内訳は次の通りです。(延数)

(一) 個人面談

- ① 進路修学(授業、試験など修学に関する相談および就職、再受験、転部科など進路に関する事) ……二二八名
- ② 心理性格(自己の心理的状态や性格に関する相談。テスト実施を含む) ……六九五名
- ③ 対人関係(大学での対人関係、友人関係、異性関係、家族関係等の対人関係に関する具体的な心理的な相談) ……二〇八名
- ④ 心身健康(心理面あるいは身体面での健康上の問題に関する相談) ……四四八名
- ⑤ 学生生活(課外活動、住まいやアルバイトなど学生生活上のさまざまな問題に関する相談) ……三三二名

(二) 談話室 ……一五四四名

(三) 教育活動(たんぼほセミナー、対人関係研修会などの活動) ……六三二名

(四) その他(分類不能) ……二二五名

また次のような援助方法による分類も試みています。

- ① 教示助言…情報提供や紹介、助言や短期の心理的サポート(励まし等)などの具体的、現実的レベルの教示助言(ガイダンス)のみによる援助。
- ② 危機介入…緊急の援助を必要としている事態(例…自殺企図、自殺念慮、急性不安状態、暴力事件、交通事故等)におかれている者に対して、危機介入を主とした積

極的介入を行う。

- ③ 教育啓発…情緒的混乱や行動異常や症状の見られない者に対して、人格の成長、自己理解の増進、能力の開発を目的とした心理教育的援助を行う。
- ④ 心理面接…心理的行動的問題を起している者に対して、カウンセリングを中心とした援助を与えるもの。そのうち医療との連携は必要としなかったものと医療と連携しつつ援助を行ったものとに分ける。
- ⑤ 媒介者援助…学生本人でなく保護者や教職員からの相談。
- ⑥ 連携協働…保護者や教職員と連携して相談に当たる。
- ⑦ 療学援助…主に精神疾患や身体疾患のために医療のケアが継続的に必要な者が、学業と療養を両立させながら生活できるようなソーシャルワークやデイケアを含めた生活全般にわたる生活臨床的援助を行う。
- ⑧ 空間提供…休憩や居場所、交流の場としての利用。
- ⑨ その他。

利用方法

「いつでも気軽に利用できる」というのが、本学の相談室です。開室時間(受付時間)は他の窓口と同様に午前八時四十分～午後四時四十分ですが、受付時間の設定はあつてないようなもので、スタッフが在室していればいつでも

(時間外でも) OK。昼休みの時間も特に閉めることはありません。ただしスタッフが一名も不在(面接中など)の場合には、スタッフ室のドアを開け、「不在」の貼り紙をします。この時間でも談話室の利用については自由になります。

受付方法もいたって簡単です。相談室のドアを開けてスタッフが声をかけてくれるだけでいいのです。スタッフの方が気付けばこちらから声をかけます。他の人との約束がなかったらすぐに面談ができます。すぐの時間が無理なときには次の約束をします。

スタッフ不在の時には「利用者カード」に記入して「申し込みBOX」に入れておいてもかまいません。本人が希望している日時の都合が悪かったらこちらから連絡をします。電話またはメールでの申し込みもOKです。

また「談話室」の利用については、特に受付をするというわけではなく、時間内であれば自由に出入りができます。

#### 「談話室」のマン

近年「こころの休憩室」や「サロン」など学生のフリースペースを設置する大学が増えていますが、本学ではすでに一九七七年頃から「談話室」の活動を始めています。狭いスペースではありますが、休憩・交流・面接への繋ぎ・アフターケア・避難所・居場所などの機能を有しており、

有効性・必要性を感じさせられました。その頃の談話室全体の雰囲気としては「サークルの部室的な雰囲気と、精神保健センターなどのダイケア的な雰囲気が入り交じった感じ」だったように思います。

以後現在に至るまで、学生が移り変わり、スタッフが変化するなかで、本学の談話室は活動を継続してきています。本学の場合、談話室とはいつても、それはパーテーションで仕切った(上部は空いている)空間で、厳密には部屋とは言いがたいものです。テーブルをかこんでソファがあり、お茶やコーヒなどが自由に飲めるようになっていきます。雑多な本の並んだ本棚、オセロや将棋などのゲーム類、各学部の時間割、カレンダー、等々があります。お茶やコーヒなどは相談室の予算で購入します。参考図書やいくつかの雑誌類も予算化されています。

談話室活動に必要なのはまずそれなりのスペースですが、それだけでなくそこにいる「人」が大切です。「場」と「人」によって、利用する学生達に「安心感」「安全感」を与えることができます。本学の談話室では「関わりすぎない関わり方」「グループ的な視点」を基本としています。

#### 専用図書や各種資料のこと

談話室スペースおよび待ち合スペースにはいくつかの書棚があり、けっこうたくさんの本が置いてあります。心

年間の利用者は延べ一五〇〇人〜二〇〇〇人になります。

出入りは自由で、利用の仕方もさまざまです。朝早くからやって来て談話室から講義に出かけていく学生、お昼の時間にお弁当を食べに来る学生、講義の合間に休憩する学生、誰か顔見知りがないかなどのぞきに来る学生、スタッフと一言一言お喋りに来る学生等々。常連のように利用する学生もいれば、時々ふらっとやって来る学生もいます。ひとり静かに過ごしている学生もいるし、顔見知りと賑やかにお喋りする学生もいます。

そもそも本学の談話室はいわば自然発生的にできてきたものです。一九七七年頃、出入りする学生達が顔見知りになったり、またスタッフの方で紹介することもあったりして、何人かが待合室の丸テーブルを囲んで談笑する、というような状況が起ってきました。そういう場を通じて、時間割の組み方や勉強の仕方について先輩に教わったり、友達のない同士が友達になったりしました。

初めの頃にはスタッフもできるだけ一緒に過ごすようにして、話題をつないだり、共通の悩みをシェアするようにしていました。そういった場のほうが、一対一の改まった面接より自分のことを話しやすい学生もいましたし、出入りしているうちに元気になっていく学生達もいました。また精神疾患で休学していた学生が、談話室を利用しながら大学生生活に馴染んでいくということもあり、そういう場の

理や性格に関するもの、大学生活に関するもの、新刊本、話題のマンガなど、種類はさまざまです。その都度必要と思われるものを、相談室の予算で購入できます。相談室を利用した卒業生や、教職員からの寄贈本もけっこう多くあります。

基本的にはの本も貸し出しOKです。(以前は貸し出しノートを置いていましたが、現在はカードにしています)いつの間にか消えてしまう本もありますが、あまり気にしないことにしています。逆にいつの間にか置いてある本もあつたりします。談話室および本の置いてあるスペースは出入り自由ですので、いつの間にか中に入ってきて、ソファに座り込んで(あるいは寝転がって)マンガに読みふけっている学生達の姿が見られることも珍しくありません。各学部の時間割・講義要項・サークル紹介・キャンパスライフ(学生生活の手引き)なども置いていますが、けっこう重宝がられています。また資格に関するものや大学院に関するものなどもできるだけ新しい版を置くように心がけています。

#### 「自分づくり」というキーワード

活動内容の項で述べたように、本学相談室の学生に対する活動は大きく次の三つになります。一つめは個人に対する、カウンセリングを中心とした相談活動で、相談の内容

については既述したとおりです。二つめは集団に対するプログラムで、一泊二日の「たんぼぼセミナー」やコンパ形式の「対人関係研修会」などのグループ活動、「興味関心マップづくり」や「映画上映会」などの各種講座などが含まれます。そして三つめは、フリースペースとしての「談話室」の活動です。

この三つは決してバラバラの活動ではなく、学生が大学生活の中で自分をつくっていくために、相談室が提供できる支援の柱となるものです。

相談室を利用する学生達は、カウンセリングの場では自分の「悩み」を通して自分の個性について考え、より自分らしく生きていくことを模索しますし、またカウンセリングという限定された場だけでなく、より広いしかし安全な場である談話室においては、人との関わり方や自分の居場所を作っていくことなどを体験することができます。さらに合宿形式のたんぼぼセミナーやコンパ形式の対人関係研修会などに参加することで集団活動を体験し、より親密な対人関係を作っていくプロセスを体験することができます。なかでも「談話室」の活動は本学の特徴であり、利用のされ方はさまざまですが、カウンセリングでの学びと集団教育プログラムとを緩やかに統合する場として機能しています。

相談室ではこのようなさまざまな活動を「自分づくりを

支援すること」と捉え、問題を解決するという意識だけでなく、一人一人の学生が個性的な存在として生きることが援助するという意識を大切にしてきました。

相談室に限らず、大学の中にあるすべての部署は、サービスマシンであると同時に教育機関であると言えます。相談室を利用する学生達は悩みを通して成長していくでしょうし、相談室の中での出会いや体験を通していろいろなことを学び、自分をつくっていくのだろうと思います。広島修道大学学生相談室はそのようないろいろな体験をする器としての機能、学生の自分づくりを支援する機能を大切にしていきたいと思っています。

#### 【参考】

- ・大島啓利（二〇〇五）自分づくり教育と学生相談活動、広島修道大学事務研修第三二号
- ・山崎恭子（二〇〇六）学生の自分づくりを支援する、広島修道大学事務研修第三三号
- ・山崎恭子（二〇〇一）「談話室」のこと、広島修道大学学生相談室報告書第七号
- ・山崎恭子（二〇〇五）学生相談室の待合室に置きたい本、学生相談研究第二五巻第三号